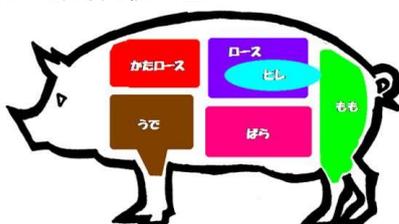
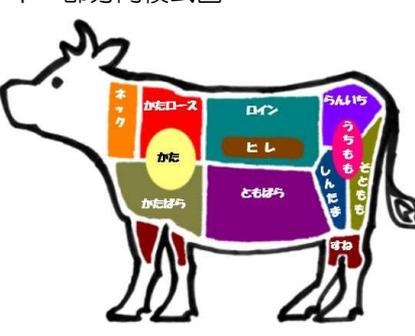
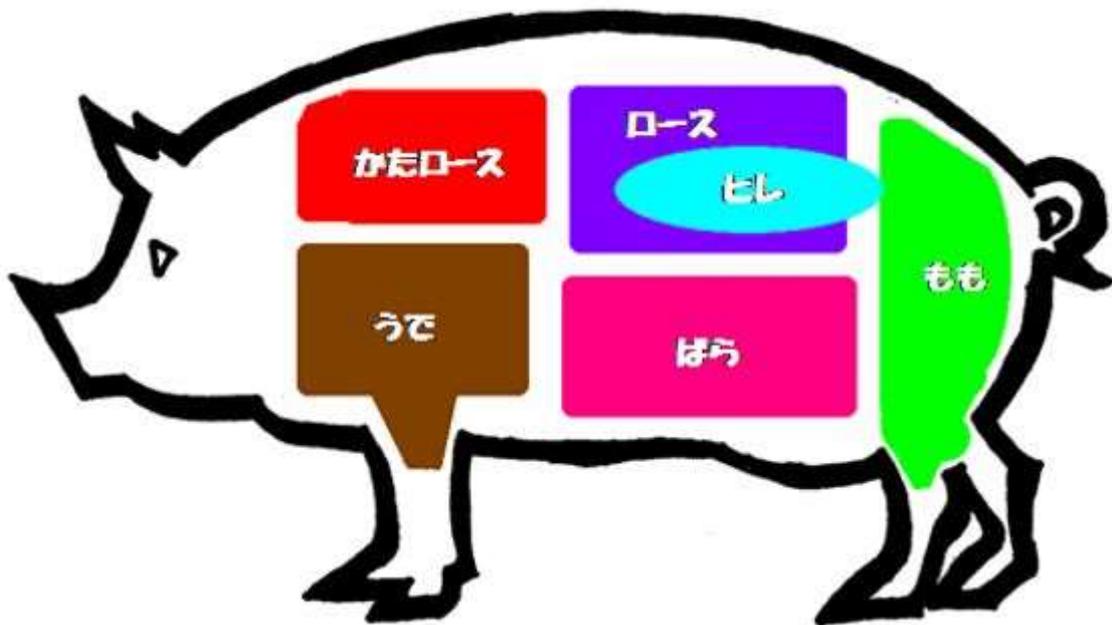


## 主な用語の解説

用 語 等	概 要 説 明
<p><b>標準偏差</b> [ <math>s</math> ] SD : Standard Deviation</p> $s = \sqrt{s^2} = \sqrt{\frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2}$ <p><math>s^2</math> : 分散      <math>n</math> : データの総数 <math>x_i</math> : 個々のデータ <math>\bar{x}</math> : データの平均値</p>	<p>標準偏差 [ <math>s</math> ] とは、分散 [ <math>s^2</math> ] の正の平方根のことであり、調査対象データのばらつきの大きさを示す値。 価格の場合、特定期間内の価格のばらつきの大きさを示す値となる。 価格が正規分布をしている場合、平均値 ± 1 標準偏差の中に対象データが 67 % 含まれる。</p> <p>分散 [ <math>s^2</math> ] とは、対象となる各データと対象となる全データの平均値の差を 2 乗した平均値のこと。</p>
<p><b>変動係数</b> CV : Coefficient of Variation</p> $(CV) = \frac{s : \text{標準偏差}}{\bar{x} : \text{データの平均値}}$	<p>変動係数とは、調査対象データの散らばりの度合いを示す指標であり、「平均に対する、データのばらつきの大きさの比率」を表す値。</p> <p>標準偏差 [ <math>s</math> ] をデータの平均値 [ <math>\bar{x}</math> ] で割って算出するので、相対的なばらつきを表すが、値には基本的には単位がないが、百分率で表示する場合もある。</p> <p>標準偏差の数値は、調査対象データの数値の大きさに左右されるので、対象データの数値の大きさが大きく異なる場合、散らばりの度合い（ばらつきの大きさ）を比較するには、標準偏差の数値より変動係数の数値の方がよい。</p>
<p><b>部分肉（公表部位）</b></p> <p>豚・部分肉模式図</p>  <p style="text-align: center;">( P22 に 拡大図 挿入 )</p> <p>牛・部分肉模式図</p>  <p style="text-align: center;">( P22 に 拡大図 挿入 )</p>	<p>牛・豚をと畜解体後、2分割した枝肉を、さらに各部位ごとに分割カットし、骨や余分な脂肪を取り除いて整形した状態の肉のこと。</p> <p><b>豚肉におけるセンターの公表部位</b> うで、かつらロース、ロース、ヒレ、ばら、もも、セット</p> <p><b>牛肉におけるセンターの公表部位</b> かた、かつらロース、かたばら、ともばら、ヒレ、ロイン、うちもも、しんたま、らんいち、そともも、すね、セット</p> <p>但し、近畿圏乳牛チルド「2」のみ「かたばら」を「三角ばら」と「プリセット」に分割して公表。</p> <p>上記、豚・牛肉の公表部位の「セット」とは、「フルセット（半丸セットを含む。）」のことである。</p> <p>牛肉では、各地域の畜種により、下記の部位のセットが追加されるものもある。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・まえセット : かた、かつらロース、かたばら</li> <li>・ロインセット : ヒレ、ロイン</li> <li>・ももセット : うちもも、しんたま、らんいち、そともも</li> </ul>

用 語 等	概 要 説 明
<p><b>部分肉公表値</b>（新算定方式）</p> <p><b>公表価格：単位 円/kg（税込）</b> 販売先までの輸送費を含む到着時点での価格。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第1四分位値</li> <li>・重量中央値（第2四分位値）</li> <li>・第3四分位値</li> <li>・刈込み平均値</li> </ul> <p><b>公表重量：単位 kg</b> 公表期間内における公表畜種別・公表部位ごとの取引データの販売重量の集計。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・取引重量</li> </ul> <p><b>公表地域</b>（部分肉の販売先地域）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・首都圏      ・近畿圏</li> <li>・中京圏      ・九州地域</li> </ul>	<p><b>第1四分位値、重量中央値、第3四分位値</b> 公表期間内の取引データを公表畜種別・公表部位毎に安い販売単価から順番に並べ、累積販売重量が取引重量の1/4にあたる重量のところに位置する取引データの単価を<b>第1四分位値</b>、1/2のところに位置する取引データの単価を<b>重量中央値</b>（第2四分位値）、3/4のところに位置する取引データの単価を<b>第3四分位値</b>としている。</p> <p>なお、<b>刈込み平均値</b>は、第1四分位値の取引データから第3四分位値の取引データまでの販売金額の累積値を同じデータ範囲の販売重量の累積値で割った加重平均値。</p> <p><b>参 照：センターHPの公開（参照）ページ</b> <b>部分肉公表値</b>については、 【 トップページ 】 畜種毎の部分肉価格表として公表。 なお、畜種・公表日等は下記（資料4）参照。 公表価格については、 【 インフォメーション 】 ページの 表題 『 部分肉価格情報における公表価格の算定方法等の見直しについて 』 の次項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・（資料2）「見直し後の算定イメージ」（PDF:84KB）</li> <li>・（資料4）「見直し後の公表の概要」（PDF:111KB）</li> </ul>
<p><b>比価</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・基準部位は「セット」。</li> <li>・基準部位のデータ値（重量中央値）を100とした。</li> </ul>	<p>基準部位のデータ値（重量中央値）に対する各部位のデータ値（重量中央値）の比（割合）。</p> $\text{比価} = \frac{\text{各部位のデータ値}}{\text{基準部位のデータ値}} \times 100$
<p><b>季節変動確認モデル</b> 時系列データ（原系列：X）は、傾向変動（T）、循環変動（C）、季節変動（S）、不規則変動（I）の4成分を持ち、次のモデルで表現することができる。</p> <p>乗法モデル <math>X = T \times C \times S \times I</math></p> <p>加法モデル <math>X = T + C + S + I</math></p>	<p>X 原 系 列：元の時系列データ T 傾 向 変 動：トレンド、趨勢的な長期変動 C 循 環 変 動：循環要因、周期的に起こる変動のうち、その周期が1年を超える中期的な指数 S 季 節 変 動：季節要因、1年を周期とする変動で、季節性とほぼ同義 I 不規則変動：不規則要因、周期性を持たないランダムな変動。傾向・循環・季節変動を除いた残りの変動として取り扱われる。自然災害、戦争、値上げ、政策変更（税率等）に伴う変動を含む。</p>
<p><b>季節調整方法</b> 下記、2方法を分析に適用した。</p> <p><b>1 移動平均（moving average）</b></p> <p><b>2 ARIMA-X13-SEATS</b></p> <p>時系列データ（X：部分肉価格の重量中央値及び取引重量）を傾向変動（Trend）、季節変動（Seasonal）、不規則変動（Random）に分解、結果を検討した。</p>	<p><b>1 移動平均（moving average）</b> 季節性が例えば1年単位で周期をもつものであれば、年単位で均すことで季節性が除去できることを利用した方法。シンプルな半面、データ末端に欠損値が生じ、直近の情報が得られない。</p> <p><b>2 ARIMA-X13-SEATS</b> 移動平均法をベースに、アメリカセンサス局で開発された季節調整方法。データ末端問題をARIMAモデルによる予測を用いて改善し、また、季節調整の精度を向上させるために、異常値や曜日変動など帰帰による調整機能を有している。調整方法として、X11とSEATSがある。 （参照：『入門 季節調整』有田帝馬著、東洋経済新聞社）</p>

豚・部分肉模式図



牛・部分肉模式図

